

# 国民の肖像

——魯迅の「車夫」と国木田独歩の「山林海浜の小民」

大東 和 重

はじめに

文学の「近代」を考えると、われわれは二つの陥穽に陥りがちである。一つは、欧米からもたらされた「近代」文明の一環としての、西欧的な「近代」文学を前提的なモデルとするために、「伝統」文学と断絶して「近代」文学が成立したと判断してしまうこと、もう一つは、すでに完成された「近代」国民国家や国語の枠組みから、「伝統」文学が内的な連続性・必然性をもって「近代」文学へと発展したと見てしまうことである。しかし、何もない所に、ある時突然外部からの刺激で「近代」文学が生じるはずはなく、また文学が社会的な制度から自由に、それ自体で発展をつづけているというのも文学の神聖化にすぎないであろう。小論では、いわゆる「西欧の衝撃」により「近代」化を余儀なくされた二つの国、中国と日本の「近代」小説を取りあげ、共通して見られる特徴

を指摘し、これらをもたらしした「近代」社会の制度について考察するという順をとる。具体的には、魯迅の『一件小事』と国木田独歩の『忘れえぬ人々』に共通して見られる二つの特徴、俗なものにおける価値の発見と、事件・光景の普遍性への信頼が、それぞれ国語運動と出版資本主義（ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』中の用語によって資本主義化された出版をこう呼ぶ）の成立によって生み出されることを考察し、「近代」小説が「国民を描く」という制度に従属していることを明らかにする。これらの制度は、「近代」国民国家形成のためのナショナルリズムによって要請される。

## 一 魯迅『一件小事』

一九一九年（民国八年）、紹興出身の魯迅という筆名の作家（一八八一—一九三六）によって発表された短編小説『一件小事』（邦題『小さな出来事』）は、おそらく現代の大多数の読

者にとって、「人間」とは、「人間」であることとは何かについて、文学の側からの真摯な問い掛けがなされていると映るであろう。しかし、「文学」や「中国」への思い入れなしに読む読者には、この作品はある居心地の悪さを感じさせるのではなからうか。

この作品は、作者の分身とおぼしき、あるいは読者に対し生身の人間としての作者魯迅を想定させかねない「我」という語り手が、一九一七年に経験したとされる「一件小事」を回想し、それについての感想を述べるという枠組みのもとで書かれている。その「一件小事」の内容というのは、ある朝「我」の乗りあわせた人力車が、檻樓をまとった老婆に突き当たり、人力車の車夫が転んで怪我をしたという老婆を助けて最寄りの派出所に向かうというものであり、これ自体については取り立てていうほどのものではない。居心地の悪さを感じさせるというのは、この取り立てていうほどのこともない「一件小事」が、わざわざ取り立てていわれていること、つまり、どこにでもありそうな事件に、特別な意味が付与されていることにある。

車夫が老婆を助けて派出所に向かうのを見送ったあとに、次のような描写がある。

私はこの時突然にある異様な感覚をおぼえた、彼（車夫、引用者注）のほこりまみれのうしろ姿が、急に大きくなり、しかも遠ざかるにつれてより大きく、仰がなくては見えないほどであると思われた。しかも、彼は私に対し、徐々にある威圧のようなものに変わっていき、はては防寒服の下に隠された「卑小さ」を搾り出さんばかりになった。

引用は『魯迅選集』（一九九一）から、拙訳による、以下同じ

ここでまず忘れてはならないのは、当時人力車の「車夫」という職業が、社会の底辺に位置する階層に属する人々のものであったということである。前「近代」中国において、およそ「車夫」という職業に従事するものが、「人権」はもちろん「人間」であるとかえ認められていなかったことを考慮に入れると、「我」が「ほこりまみれ」の車夫の「うしろ姿」に「大」「人間」性を認め、同時に士大夫階級に属するらしい「我」が自身のなかにある「小」＝「卑小さ」を告白するというのが、いかに異常な事態であるかがわかる。

例えば、一九三〇年前後の上海を舞台に綴られた金子光晴（一九五―一九七五）の自伝『どくろ杯』には、魯迅や郁達夫（一九六―一九四五）ら中国の文学者らとの親交とともに（この二人が親しくしていたことについては繰り返し記述

がある、「黄輓車苦力」についての次のような描写がある。

碼頭の苦力ばかりではない。税関の外に、ながい梶棒の先をぶつけあって、下船の客の出てくるのを待ってひしめきあっている黄輓車苦力もなつかしい。――略――文字通り彼らは、じぶんのいのちを削って生きる。厳寒でも裸足で、腫物のつぶれたきたない背中を、雨に洗わせて走る。客は、その河童あたまを靴の先で蹴りながら、ゆく方向を教える。人力車は、もと日本からわたったものであるが、日本の車夫のようなきれいで立ちはやくめほど、たった二十枚の銅貨を稼ぐことがむずかしいのだ。――略――たしかに苦力たちは、欲望の世界で、欲望を抑圧された危険なかたまりで、その発火を、自然発火にしろ、放火にしろ、おそるるあまり、周囲の人たちは、彼らがじぶんたちを同等の人間であることを意識して不逞な観念を抱くようなことのないように、人間以下のものであるらしく、ぞんざいに、冷酷に、非道にあつかって、そうあってふしぎはないものと本人が進んでおもしろいようにしむけた。そういう変質的なまであるかどうかについては、中国人は天才であった。

かつて心をひらいて交際した文士の郁達夫のような、ものわりのいいインテリでも、うるさく車をすすめる苦力を追いかうとき、犬でも追うように足をひらいて、蹴散ら

し、蹴散らしして私をおどろかせた。

、引用は『金子光晴全集第七巻』  
(一九七五(一九七二))による

『どくろ杯』は一九三〇年前後の、それも上海を描いているのであり、『一件小事』は一九一七年の北京を描いているのであるから、それぞれの時期・土地の車夫を一概に同一視して論じるわけにはいかないが、時代的に『一件小事』の北京がより前「近代」に近いこと、当時の上海が欧米の「近代」思潮の受入れ窓口になっていたこと、および前「近代」中国社会における階層秩序が、都市によって極端に異なっていたであろうことから考えるに、両者の間にそう大きな差があろうとは思われない。当時の車夫は、北京においても上海においても、「人間以下のものであるらしく」思い込ませるというよりは、そもそも当人も周囲も(「近代」的な意味での)「人間」であるとは思わなかったのであり、それは郁達夫のような当時の進歩的な士大夫階層にあっては変わらなかった。『一件小事』における、賤民階層に属する車夫「大」「人間」性に対する、士大夫階層に属するらしい「我」の内面「小」「卑小さ」という構図は、意識的にせよ無意識的にせよ創り出されたのであり、現代の読者であるわれわれが『一件小事』に深い「人間」性を感じるとすれば、それは『一件

小事』が書かれた以降の価値観、つまり歴史的に形成された『近代』の価値観の中に生きていくからである。『一件小事』の一つめの特徴として挙げられるのは、以上のように、社会的階層の底辺に位置する、賤しく俗なものに価値が見いだされているということである。

さらにもう一つ、居心地の悪さを感じさせるのは、「我」が「一件小事」を語るのに、これがたんに取るに足らない事件としてではなく、あるいはこの時・この場所かぎりの、一回かぎりの事件としてではなく、ありふれた事件であるにもかかわらず特権化された事件として語っているということである。この「一件小事」とは、ありふれていること＝普遍的であることと、特別であることが混在している事件なわけであり、その特別さは普遍に通じている。つまり、あるべき「人間」性を備えた社会や人間の縮図として、「一件小事」は描かれている。作品の最後で、「我」は次のように語る。

この事件は今にいたるまで、折りに触れては思い出す。私はこのため、苦しみに耐え、努力して、私自身について思いをめぐらそうとする。数年来の政治も軍事も、私にとっでは幼いころ読んだ「子曰く」や「詩に云ふ」と同じであって、ほとんど記憶にない。ただこの小さな出来事だけが、

いつも私の眼前に浮かび、ときにはいっそう鮮明になって、私を慙愧させ、私を生まれ変わらせるのであり、そして私の勇気を希望を高めてくれるのである。

当時の士大夫階級に属する大多数の人々が、実際の事件として「一件小事」に遭遇したならば、恐らく、何の感慨も抱かず、当初の「我」のように「車夫は余計なことをする、おせっかいというものだ、好きなようにしろ」と感じ、たんに取るに足らない事件に終わったであろう。あるいは、もしこの事件が一回かぎりの事件として認識されていたならば、事件自体についてではなく「私自身について思いをめぐらせたり、「私の勇気を希望を高めてくれ」たりするようなことはないはずである。「我」は事件によって、事件自体についてではなく、「我」自身の「小」、つまり「我」の内面について考えるが、そのきっかけとして、「我」は車夫の「うしろ姿」にその「大」＝「人間」性を発見する。この「うしろ姿」とは、一般化・普遍化された車夫、大勢いるなかでひとりの「人間」としての車夫であり、そのような車夫がこの中国には存在すると考えるからこそ「私自身について思いをめぐらせたり、「一件小事」が「私の勇気を希望を高めてくれ」るのだ。例えば、前年の一九一八年魯迅により発表されたエッセイ「随感録 四十」では、毎回数通来る手紙の文面が決まり文句は

かりの口先だけであり、なんの感慨もないとして、次のように述べる。

ただ、見も知らぬ若者から送られてきた詩だけが、私にとって意味がある。

### 愛情

私は可哀相な中国人。愛情！ 私はお前がなんなのかららない。

私には両親がある、私を導き育ててくれた、私によくしてくれた、私も同じようによくしてあげた。――略――だが誰も私を「愛」してはくれず、私も誰も「愛」さなかった。

十九の年、両親が私に妻を見つけてくれた。――略――彼らのちょっとした戯れ言が、私たちの生涯の縁結びとなる。まるで二匹の家畜が飼い主に命令されたようなもの、

「さあ、お前ら仲良く暮らせよ！」

愛情！ 可哀相な私はお前がなんなのかららない。

詩の出来不出来、意味の深淺は、しばらく置いておこう。ただ私は、この詩は血から生まれたものであり、目覚めた人間の本当の声であることを言いたい。

愛情とはどんなものか？ 私にも分からない。――略――

しかし東の空は明るみはじめた、人類がすべての民族に求めるのは「人間」である――当然「人間の子」でもある――が、我々すべては人の子にすぎない、息子の嫁や嫁の夫にすぎない、それでは人類の前に捧げることはできない。

しかし悪魔の手には、ついに光の漏れる場所ができ、光明を覆いきれなくなった。人の子は目覚めた。彼は人類の間には愛情があるべきだと気付いた。かつてより老いも若きもが犯してきた罪に気付いた。そのため苦悶が起こり、大きく口を開けてこの叫び声を発することになった。

ここでも、車夫の「うしろ姿」に「大」――「人間」性が発見されたように、「見も知らぬ若者から送られてきた詩」に「目覚めた人間の本当の声」が発見されるが、それは「見も知らぬ若者」が「人類がすべての民族に求める」「人間」、ここではつまり「目覚めた人間」――「中国人」であるからであって、この詩を送ってきた生身の若者自体に興味はない。どこかに必ずいる普遍的な「目覚めた」「中国人」であってはじめて意味を持つのだ。「一件小事」をたんに取るに足らない事件として見るにしても、一回かぎりの事件として見るにしても、ともに、前「近代」的な認識に従っているのであり、車夫と己との間に決定的な階級の断絶を見ていることになる。それで

は、この作品は書かれようがなく、「一件小事」が、以上のようになことにありふれた、どこにでも起こりうる事件である、つまり中国の国家内で、中国人によって引き起こされる「一件小事」が普遍的であると信じるからこそこの作品は成り立つのだ。『一件小事』の二つめの特徴は、中国のどの場所でも起こりうるという普遍性への信頼が、この事件を支えている、ということである。

## 二 国木田独歩『忘れえぬ人々』

以上に指摘した特徴は、しかし中国の「伝統」文学から、中国「近代」文学が成立する過程で、中国独自のものとして生まれたのではない。一八九八年（明治三十一年）に書かれた国木田独歩（一八七一—一九〇八）の『忘れえぬ人々』にも、直接の影響関係が想定されるわけではないにかかわらず、魯迅の『一件小事』に見られる二つの特徴、俗なものにおける価値の発見と、事件の普遍性への信頼が見られる。

『忘れえぬ人々』は、「大津」という「無名の文学者」が、「溝口といふ宿場」で「秋山」という「無名の画家」に出会い、自作の原稿「忘れ得ぬ人々」について語るといふ枠組みのもとで書かれている。「大津」の言う「忘れ得ぬ人々」とは、「恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも欠かない

で、而も終に忘れて了ふことの出来ない人」のことであるが、その例として、「大津」は次のような「人々」に「光景」を挙げる。

そのうち船が或る小さな島を右舷に見て其磯から十町とは離れない処を通るので僕は欄に寄り何心なく其島を眺めてゐた。一略一と見るうち退潮の痕の日に輝つてゐる処に一人の人がゐるのが目についた。たしかに男である、又た子供でもない。何か頻りに拾つては籠か桶かに入れてゐるらしい。二三步あるいてはしやがみ、そして何か拾つてゐる。自分は此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此人をぢつと眺めてゐた。船が進むにつれて人影が黒い点のやうになつて了つた、そのうち磯も山も島全体が霞の彼方に消えて了つた。その後今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度此島かげの顔も知らない此人を憶ひ起こしたらう。

『暫くすると朗々な澄むだ声で流して歩く馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて来た。一略一

『人影が見えたと思ふと「宮地やよいところぢや阿蘇山ふもと」といふ俗謡を長く引いて丁度僕等が立てゐる橋の少し手前まで流して来た其俗謡の意と悲壮な声とが甚麽に僕の情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な壮漢が手綱を

牽いて僕らの方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はちつと睥視めてゐた。夕月の光を背にしてゐたから其横顔も明毫とは知れなかつたが其遅しげな体軀の黒い輪郭が今も僕の目の底に残つてゐる。

引用は『定本国木田独歩全集』による、以下同じ

さらに「大津」は「四国の三津が浜」の魚市場で見かけた「琵琶僧」・「北海道歌志内の鮎夫、大連灣頭の青年漁夫、番匠川の瘤ある舟子」などを「忘れ得ぬ人々」として挙げるが、これらの人々が当時の社会において農民よりもさらに低い階層、もしくは賤民階層に属していることは、『一件小事』の車夫に同じである。これらの人々は独歩の日記『欺かざるの記』明治二十六年三月二十一日に記された「人類眞の歴史は山林海浜の小民に問へ」という有名な一節の「山林海浜の小民」に相当する。

「大津」は、それらの人々を「憶ひ起こす」理由として次のように語る。

『要するに僕は絶えず人生の問題に苦しむでゐながら又た自己将来の大望に圧せられて自分で苦しんでゐる不幸な男である。』

『そこで僕は今夜のやうな晩に独り夜更て燈に向つてゐると此生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催ふて来る。その時僕の主我の角がぼきり折れて了つて、何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古い事や友の上を考へだす。其時油然として僕の心に浮むて来るのは則ち此等の人々である。さうでない、此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の人々である。我れと他との相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか、といふやうな感が心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつたふことがある。其時は実に我もなければ他もない、たゞ誰れも彼れも懐かしくつて、忍ばれて来る、』

『僕は其時ほど心の平穩を感じることはない、其時ほど自由を感ずることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて総ての物に対する同情の念の深い時はない。』

『一件小事』の「我」にしても、『忘れえぬ人々』の「大津」にしても、いわば当時の社会において知識人の階級に属するにもかかわらず、世俗的な成功を収めている身ではない。ただし、彼らはその立身出世や社会的な事件から意図的に眼を逸らそうとしている。その名目となるのが、「私自身について思いをめぐら」すことや「人生の問題」である。彼らはいわ

吾が心をして躍らしむる一種の響あり、曰く人類進運の壯調之れなり。世界人類の人類の發達變化の高壯偉大なる希望の張胆的音調之れなり。

吾が心耳は多くの幽音に接して其の真消息に通ぜざる可からず、科学者、天文学、物理学者の心の壯音をも聞かざる可からず。詩人、哲学者、宗教家が心に響く幽音玄調をも聞かざる可からず、大航海家、大商業家の心を打つ偉調をも聞かざる可からず、山間田野の民が心に響く幽音玄調をも聞かざる可からず、車夫貧民等の心を打つ調をも聞かざる可からず。又かかる個人的のみに非ずして、社会なる者、国家なる者、国民なる者、人種なる者が叫ぶ音にも接せざる可からず。

ヒュマニティーの真音は一方に偏せず。

「人類進運の壯調」つまり「ヒュマニティーの真音」は、社会的に大事業を成し遂げた人々にだけでなく、「山間田野の民」や「車夫貧民」からも「心耳」を通して聞かれるのであり、その「響」は「国民」の「叫ぶ音」にも通じる。「人類眞の歴史は山林海滨の小民に問へ」に集約される独歩の「小民」發見の過程は、「小民」に「ヒュマニティーの真音」つまり「人間」性が見出される過程であり、しかもそれは「国民」の「ヒュ

ば「人間」とは、「人間」性とは何かという問いに面すること至上の使命と考えたのだ。彼らは自己の内面を探究することとでその問いに応えようとするが、しかしそれはまったくの孤独な作業として遂行されるのではない。『一件小事』の「我」は、「苦しみに耐え、努力し」なくては「私自身について思いをめぐら」すことができず、『忘れえぬ人々』の「大津」は「生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催ふて来る」のである、彼らの内面探究には自身の行為がまったくの孤独な作業ではないことを確信させてくれるものが必要である。それが、『一件小事』の「我」にとって「車夫」であり、『忘れえぬ人々』の「大津」にとって磯を漁る漁夫や馬子であるが、「車夫」が「ほこりまみれのうしろ姿」において見出されたように、『忘れえぬ人々』においても「顔も知らない」「此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐるこの人」や、「横顔も明毫とは知れなかつた」「馬子」が見出されるのである。これらの人々はそれぞれが個別に認識されるのではなく、独歩のいう「山林海滨の民」（『欺かざるの記』）として認識される。しかも、記憶されるのはこれらの人々自体でずらない、「さうでない、此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の人々である」。『忘れえぬ人々』に約五年先立つ独歩の日記『欺かざるの記』明治二十六年五月十四日には次のような記述がある。



マニティーの真音」と連動している。

「車夫」との事件が、中国のどの場所でもおこりうるといふ普遍性への信頼に支えられていたように、『忘れえぬ人々』の「光景」は、「我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか、といふやうな感」に支えられている。これは、間違っても「老荘思想の影響」などというやうなものではない。当時の賤民層である「忘れ得ぬ人々」が「大津」によって「人間」であることが発見され、そのような「人間」が「天の一方地の一角」を「大津」と共有しながら生きており、「無窮の天に帰る」という、同一の共同体への帰属意識が表明されている。ここでは「忘れ得ぬ人々」はもはや「人間」というよりは「国民」なのであり、「光景」は「国民」的「光景」なのだ。「忘れ得ぬ人々」の「光景」は当時の日本のどの場所でも、「大連」でも見られるのである。

### 三 「近代」小説を支える二つの装置

#### — 国語運動と出版資本主義

直接の影響関係が想定されるわけではない魯迅の『一件小事』および国木田独歩の『忘れえぬ人々』に見られた特徴を整理すると、一つには俗なものにおける価値の発見、二つに

は事件・光景の普遍性への信頼ということになるが、この二つの特徴は文学が「近代」化する過程で、必然的に生じるのであろうか。文学にとって内的なものなのだろうか。

『一件小事』において俗なものに価値が発見されるのは、一九一九年という、中国文学が「文学革命」にさしかかった時期であった。『忘れえぬ人々』は、一八九八年の発表であり、日本文学が最初に「言文一致」を達成したとされる一八八七年第一編刊行の二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）の『浮雲』より一〇年余を経てはいるが、『浮雲』以降「言文一致」が一頓挫していたこと、あるいは「言文一致」の先駆である『浮雲』そのものが未完に終わったことは周知である。二葉亭四迷による清新な翻訳『あひびき』『めぐりあひ』が国木田独歩をして武蔵野の美を発見せしめたことは有名だが、二葉亭四迷には翻訳でしか出来なかった「言文一致」を、国木田独歩が実作において完成したのでいえよう。

さらに、中国および日本において国語という概念が成立してくるのも、「文学革命」や「言文一致」の渦中で両作品の書かれた時期である。日本においては一八九四年の日清戦争以降、「近代」国民国家形成が急速に進み、国語運動が本格化して、「小学校令」改正（一九〇〇）・国語調査委員会結成（一九〇二）となって結実する。その理念は、前島密（一八三五—一九一九）の建議以来懸案であった綴り方の制定と、「言文

一致」であった。

中国では、変法運動（一八九八）以降派遣されることになった日本への留学生により、「国語が如何なる形をとるにせよ、それは新しい民族国家の運営のうえで不可欠の要素となる」（ラムゼイ『中国の諸言語』）とみなされ、辛亥革命（一九一）以降「近代」国民国家整備の一環として、国語運動が本格化し、読音統一会（一九一三）・国語統一準備会（一九一九）の審議を経て、「国音」の統一が図られた。これら政府の推進した国語制定は、文字の音声化に重点があり、「国語」および「白話」を規範とした俗語革命としての国語運動は民間の知識人、主に文学者によって担われる。それを劇的に示すのが、周樹人という日本への留学生であり、彼は一九〇二年から一九〇九年まで日本に滞在、帰国後は一九一二年より民国の教育部に勤め、やがて北京に赴き教育部社会教育司第二科科长・第一科科及び僉事を歴任、翌年読音統一会に参加する。いわば民国政府による国語制定の中心にいたわけであるが、のちに魯迅という筆名で「文学革命」を実践することはいうまでもない。このように体制の側からなされた国語制定が、民間の側から「言文一致」・「文学革命」という形で補完され、両者の完成を待つて国語が成立する。

「近代」国民国家に提供された言語Ⅱ国語は、それが俗語であるということに最大の特徴を持っている。権威ある文言

に対し、卑俗ではあるがより如実に内面を描写できると考えられた「白話」・「口語」Ⅱ俗語を自在に操った最初が、魯迅と国木田独歩だったのであり、それは同時に小説内容においても俗なものに価値が発見されることと平行していた。つまり、国語の成立と『一件小事』や『忘れえぬ人々』において俗なものに価値が発見されるⅡ国民が発見される過程は不可分に結びついていた。

『一件小事』が事件の普遍性への信頼に支えられていることにしても、文学外の要因が働いている。中国の出版、特に新聞が、この時期に至ってようやく企業の独立採算による、政党の宣伝道具からの自立がはじまり、小説も、特定の政治的立場を正当化するような、いわば功利的な小説から、芸術としての小説、小説のための小説が生まれてくる。このような新聞・小説は、一見小説以外のなものにも従属しないと見えながら、実は「近代」化による国民国家の形成を強力に推進するための、表面には現れない原理に忠実である。佐藤成基は「近代」国民国家について次のように述べる。

「ネーション」が近代的な意味あいでも用いられるとき、その「ネーション」への身分や地域差を越えた「人民」全般の平等な帰属、およびその一つの政治的単位としての「ネーシ

ヨンの「主権」が想定されている。

「ネーシヨン・ナシヨナリズム・エスニシティ

——歴史社会学的考察——」

『一件小事』であれば、「うしろ姿」の車夫と士大夫らしき「我」の間に前「近代」的な階層の相違を見るのではなく、車夫も「我」も同じように「人間」性を備えた、中国人という範疇に属することが描かれるのであり、『随感録』にしても、筆者と「見も知らぬ若者」とは、同じく「目覚めた人間」として、「中国人」として連帯を結ぶ。あるいは『忘れえぬ人々』においても、瀬戸内の小島で磯漁りをする人、宮地の馬子、「四国の三津が浜」の魚市場で見かけた「琵琶僧」、「北海道歌志内の鉾夫、大連湾頭の青年漁夫、番匠川の瘤ある舟子」など、主人公「大津」とは階層も郷里も直接に関係しない、当時としては贱民層の人々が、「大津」という文学青年によって、「われと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路をたどり、相携えて無窮の天に帰る者ではないか」として表象される。彼らは、階層や、郷里や言語を異にしている、それはもはや彼らを隔てることにはならず、ここでは「ネーシヨン」への身分や地域差を越えた「人民」全般的な帰属——国民の登場が実現されている。「近代」国民国家の領域内の均質性と、「近代」国民国家

の構成員が、特定の地域政権や派閥ではなく、国家におしなべて直接に従属することが要求される「近代」国民国家の原理が、これらの作品には濃厚に凝縮されている。そして、こうした新聞・小説の政論からの自立——「近代」国民国家の原理への従属は、出版という形式が資本主義化されることによって支えられる。

## むすび

小論では残念ながら、「近代」小説を支える二つの装置、国語運動と出版資本主義については詳述できなかったが、ナシヨナリズムの要請に応じて国語が成立する経緯、資本主義の発達に伴う出版産業、とくに新聞産業の発達および「近代」小説の構造がナシヨナリズムを補強することについては、いずれの機会を待って論じたい。

- ・ 魯迅『魯迅選集』人民文学出版社 一九九一 北京
- ・ 国木田独步『定本国木田独歩全集』学習研究社 一九七八
- ・ 北野昭彦『国木田独歩の文学』桜楓社 一九七四
- ・ R・ラムゼイ『中国の諸言語』大修館書店 一九九〇（一九八

- ・村田雄二郎「文白」の彼方に——近代中国における国語問題  
——『思想』一九九五年七月号 岩波書店
- ・柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社 一九八〇
- ・酒井直樹「死産される日本語・日本人——日本語という統一体の制作をめぐる（反）歴史的考察」『思想』一九九四年一月号 岩波書店
- ・ベネディクト・アンダーソン 白石隆・白石さや訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』リブポート 一九八七（一九八三）
- ・佐藤成基「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ——歴史社会学的考察——」『思想』一九九五年八月号 岩波書店